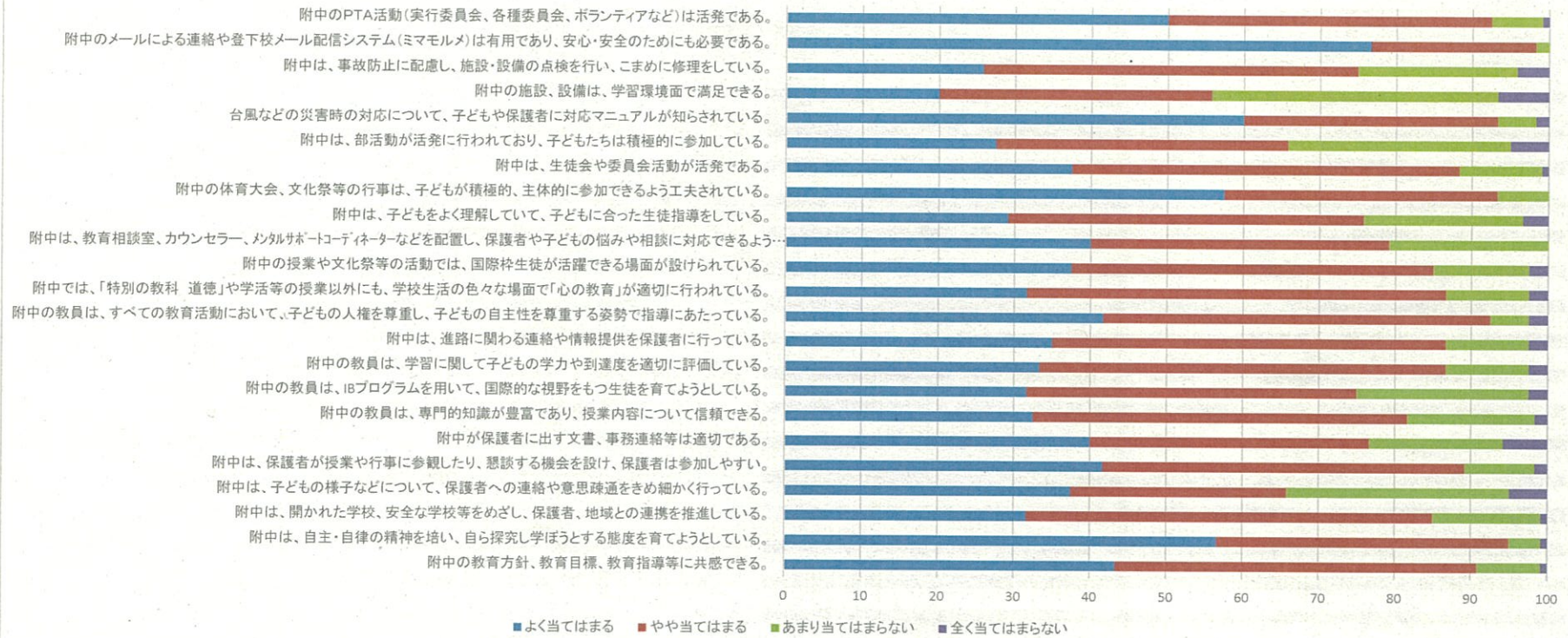


全校生徒



全学年保護者



本年度の学校評価はIB認定校1年目ということもあり、例年とは評価項目が異なるものであった。また、新型コロナウイルス感染症拡大防止による学校休校から始まったこともあり、例年とは非日常的な学校生活となったことを前提とするものである。

そのような中で、4月から5月にかけての臨時休校に伴い、オンライン授業を実施することができた。これらは、「ICT機器を利用して、教え方に工夫している先生が多い」という項目において、90%を超える生徒が「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答していることから分かるものである。

また、「学級活動（学活）や総合学習、コミュニティプロジェクトなど、将来の進路や生き方について考える機会がある」「先生はIBプログラムを用いて、国際的な視野をもつ生徒を育てようとしている」「附中では、授業や文化祭などの活動の中で、国際枠生徒の経験が生かされる場面がある」等についても、約80%以上の生徒が肯定的な回答をしている。このことから、IB認定校としての国際的な取り組みの成果と考えられる。さらに、学習指導要領の示す「主体的・対話的で深い学び」に照らし合わせた時、「自分の考えをまとめたり、話し合ったり、発表する授業がよくある」「附中は、自主・自律の精神を育て、自ら求め学ぼうとする生徒を育てようとしている」について肯定的であることから、子どもたちの思考力の伸張が期待できる。

次に、安全教育の視点からである。本校の大きな特徴の一つに、安全教育がある。安全教育については、地震や火災等の避難訓練、防犯訓練、事故対応訓練等、校内で起こりうる多様な事故等に対応出来るように、カリキュラムとして組み込まれている。「学校で使う道具が壊れたりガラスが割れた時など、すぐに修理される」「地震や火災などが起こった場合、どうしたらよいかを生徒が理解している」等の回答から、本校の安全教育が子どもたちに浸透していることが理解できる。

附属の役割の一つである教育実習においても、「教育実習は、多くの実習生と触れ合う機会が楽しい」「実習生の授業は、工夫が凝らされていて興味・関心が高まる」という項目において、いずれも80%以上が肯定的な回答であることから、教育大学の附属校としての役割を果たしているといえる。

最後に、生徒指導についてである。これについては、生徒指導事案が発生した時、教員が子どもたちに寄り添って生徒指導ができていたことが、各項目からも顕著である。しかしながら、その中で、「先生に体罰を受けたと感じたことがある」と回答した生徒も、各学年において10%前後いることも明らかである。これについては、この調査を実施（2020年12月）後に、各担任等において、クラスでの子どもたちの様子を観察し、また必要であればクラスでの個人面談や班長会議、生徒会主催の自由に討議する場を設けるなどして、子どもたちから角度を変えて話を聞くなどの取り組みを行った。その結果、日ごろ何も感じない一言が、体調不良や家庭環境またはクラスでの友人関係、思春期ならではの悩み等により、少し厳しく感じられたことなどから、そのような回答をしたと答える生徒がいたことも事実である。だが、体罰事案と捉えられる訴えはなく、子どもたちは楽しく学校に通っていると言える。

保護者については、生徒のアンケート結果と連動しており、子どもたちが学校生活を有意義に過ごしている場合は、保護者のご理解や協力も得られていると考えられる。その中で、顕著であるのは、進路指導についてである。これは、学年が進行するにしたがって、進路等の情報を保護者に対して発信していくことから、やはり1年次ではそれらについての情報が保護者の立場から見ると少ないと感じているようである。学年に関わらず、色々な情報を保護者に提供していくことが、今後学校として求められていることであると理解し、来年度以降は、それらを改善していけるよう取り組んでいきたいと考える。

以上のことから、今後も、定期的に子どもたちと面談を行うなど、子どもたちに寄り添い、保護者の方とも連携をとりながら、附属池田中学校らしい教育活動を展開していく予定である。